

平成27年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成27年8月~12月)のポイント

海況

黒潮は、平成27年8月中旬にB型^(※1)からC型^(※1)になる。沿岸水温は、潮岬以西が「**平年並**」^(※2)、熊野灘~伊豆諸島北部海域が8月~10月は「**平年並**」~「**やや高め**」^(※2)、11月以降は「**平年並**」~「**低め**」^(※2)、鹿島灘~常磐南部海域が「**平年並**」~「**高め**」^(※2)で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

B型：八丈島の北を通過、南端が北緯32度以北で33度以南

C型：八丈島の南を通過

別添中央ブロック海況予報の図1を御参照ください。

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、やや高め=平年値+1.0℃程度、

高め=平年値+1.5℃程度、低め=平年値-1.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マイワシ

前年を上回る海域が多い。

カタクチイワシ

前年を下回る海域が多い。

ウルメイワシ

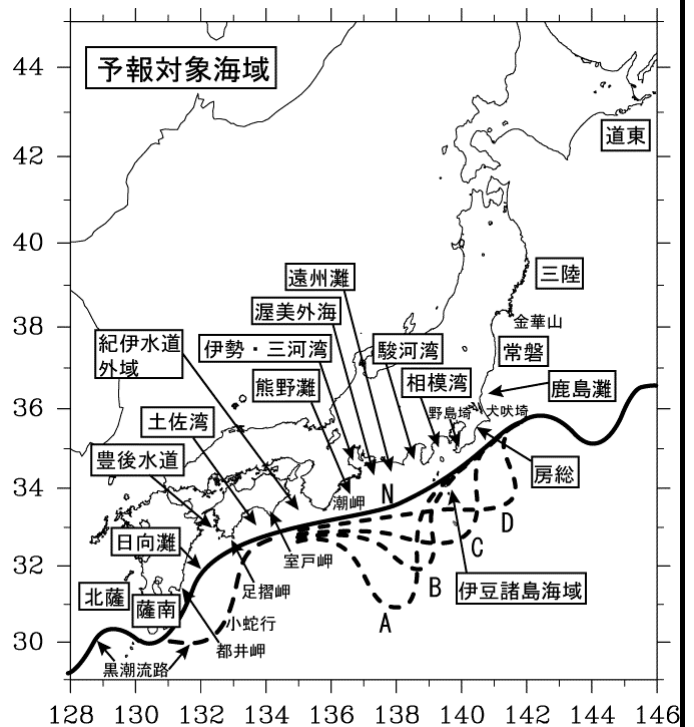
前年を下回る海域が多いが、全体としては上回る。

マアジ

低水準ながらも前年並~上回る海域が多い。

マサバ・ゴマサバ

マサバは前年並。ゴマサバは伊豆諸島以西では前年を下回る海域が多く、犬吠以北では前年を上回る。



問い合わせ先

国立研究開発法人水産総合研究センター 中央水産研究所

担当：市橋、川崎

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2015年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬沖では、8月以降は接岸傾向で推移する。
- ・足摺岬～潮岬沖では、8月に小蛇行の東進により一時的に離岸する。

◎潮岬以東

- ・8月中旬にB型からC型になる。9月～10月は流路変動を伴うが、その後もC型基調で推移する。
- ・房総沖では、離接岸を繰り返す。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、黒潮の離接岸に伴って一時的に暖水が波及することがある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、8月～10月は黒潮流路の変動に伴う暖水波及がある。11月以降は概ね冷水域となる。
- ・伊豆諸島南部海域は、8月上旬までは暖水域に、8月中旬以降は概ね冷水域に覆われる。9月～10月は、黒潮流路の変動により暖水域に一時的に覆われることがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・房総沖での黒潮の離接岸に伴い暖水が波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・潮岬以西は、「平年並」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は、8月～10月は暖水波及の影響があり「平年並」～「やや高め」。11月以降は概ね「平年並」～「低め」で推移する。
- ・伊豆諸島南部海域は、8月上旬は「高め」、8月中旬以降は概ね「低め」で推移する。
- ・房総沿岸域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。
- ・鹿島灘～常磐南部海域は、「平年並」～「高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2015年3月～7月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・3月中旬、B型からC型となった。
- ・5月下旬、伊豆諸島南部海域にあった冷水域が房総沖に移動し、黒潮が八丈島付近を一時的に流れていたが、6月上旬には八丈島より南を流れるようになった。
- ・6月下旬、伊豆諸島南部海域にあった冷水域が房総沖に移動し、N型となった。
- ・7月下旬、B型になった。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁の月平均位置は、3月～5月は屋久島南付近の平均的な位置、6月は大きく離岸した。

◎潮岬以西

- ・1月下旬以降、都井岬沖では「接岸」～「やや離岸」で推移した。
- ・5月下旬、都井岬沖で小蛇行が形成され始め、6月上旬には「著しく離岸」となった。
- ・6月上旬～7月中旬、足摺岬～潮岬沖を小蛇行が東進した。

◎潮岬以東

- ・3月中旬以降、熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に覆われた。
- ・4月～5月、熊野灘～遠州灘の表層には断続的に黒潮から暖水が波及した。
- ・3月中旬～5月中旬、伊豆諸島南部は概ね冷水域に覆われた。
- ・5月下旬、黒潮が一時的に八丈島付近を流れ、伊豆諸島北部海域に暖水が波及した。
- ・6月下旬、伊豆諸島南部海域は黒潮の南の暖水域に覆われた。
- ・野島埼沖での黒潮は、概ね離岸で推移した。
- ・房総沖に冷水域が持続して存在した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・3月～4月、鹿島灘には黒潮系暖水が波及したが、常磐南部海域では冷水の影響が残った。
- ・5月～6月、冷水域が後退し、全域に暖水が波及した。
- ・7月、沖合域に黒潮の暖水が波及した。

現況 (2015年7月27日現在)

(1) 黒潮

- ・ B型流路で蛇行規模を拡大しつつある。
- ・ 房総沖の冷水域の南方を迂回して流れている。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬～足摺岬沖で「かなり離岸」、室戸岬沖で「やや離岸」、潮岬沖で「接岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 伊豆諸島北部海域から遠州灘へ暖水が波及している。
- ・ 伊豆諸島南部海域は、黒潮の南の暖水域に覆われている。
- ・ 房総沖に冷水域が存在している。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 鹿島灘には黒潮系暖水が波及している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

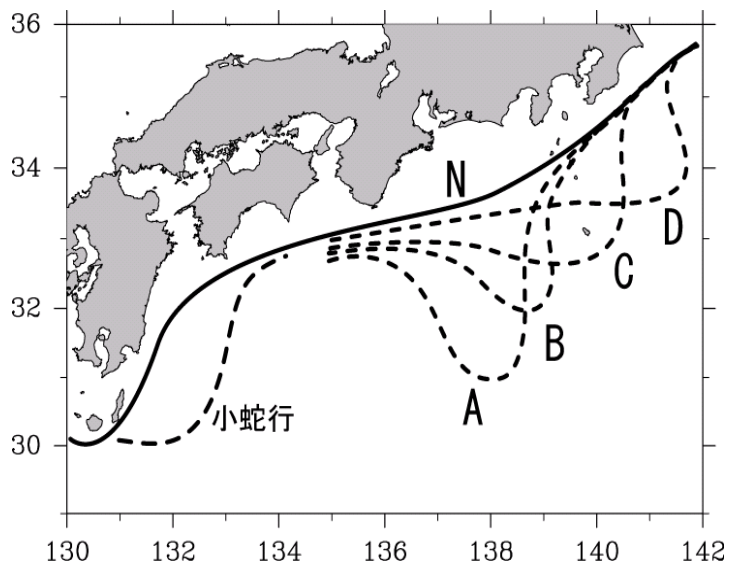


図1 黒潮流型の分類

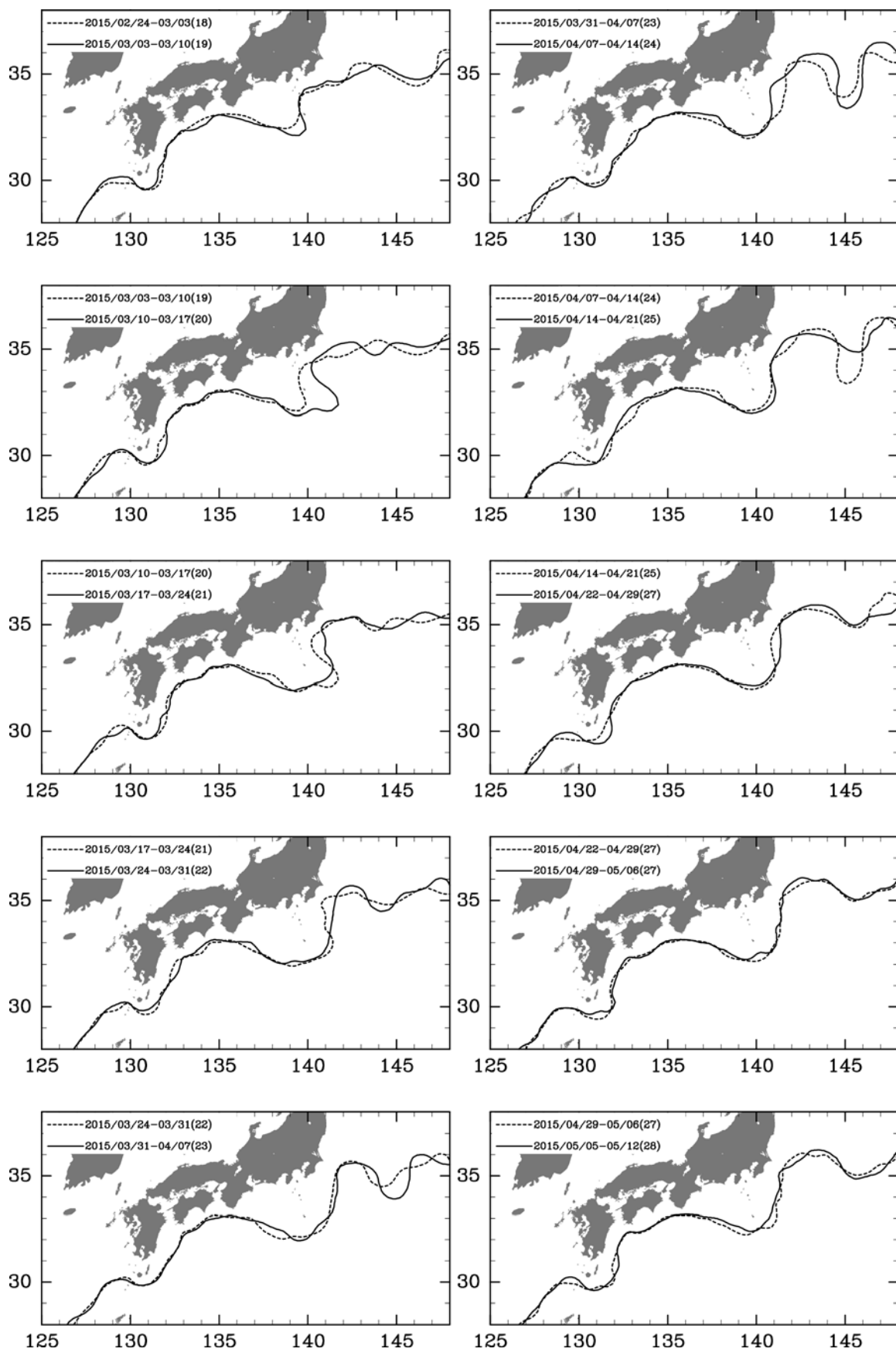


図2 黒潮流軸のパターン

(2015年3月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

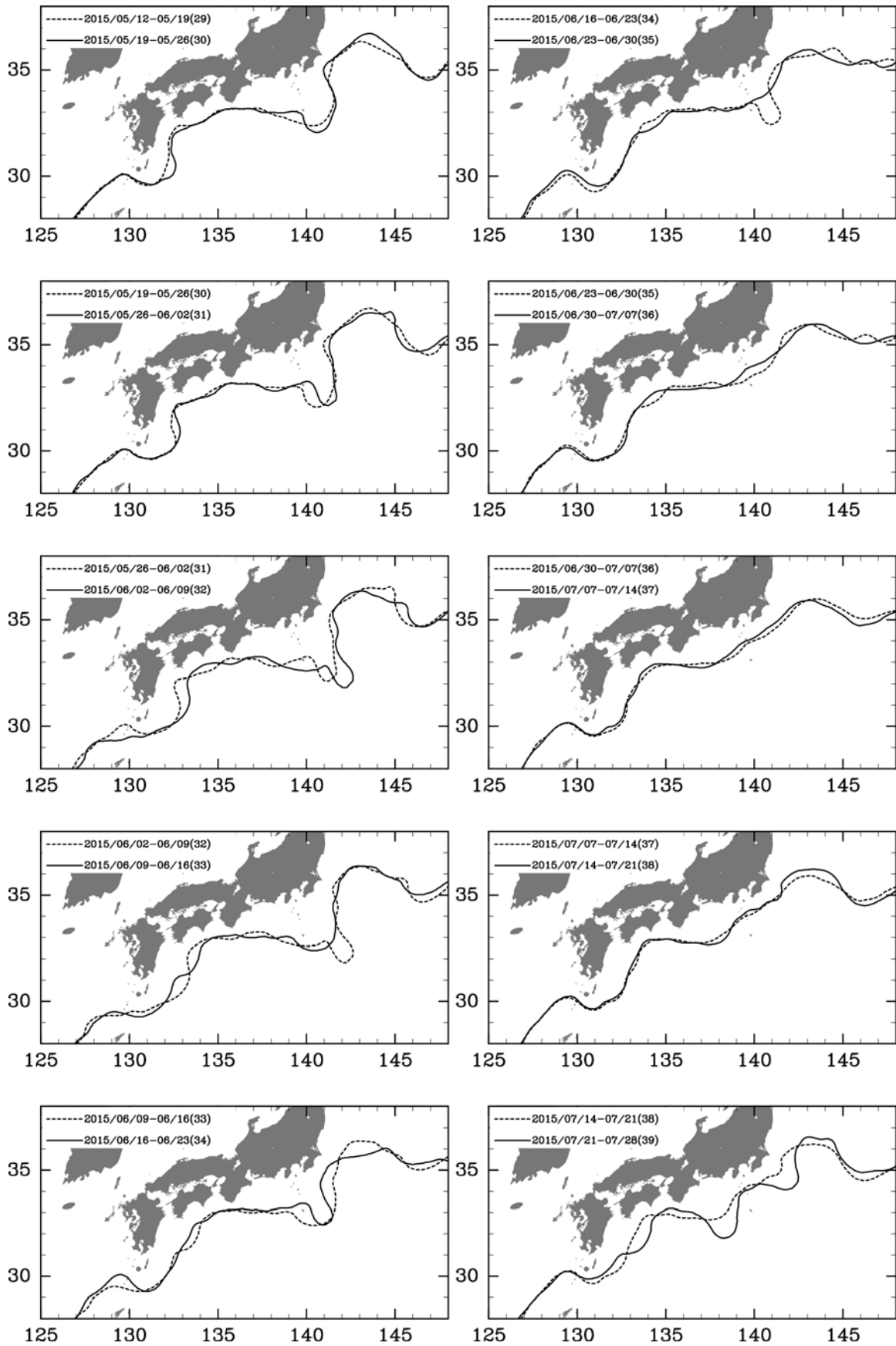


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2015年3月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2015（平成27）年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2015（平成27）年級群）、1歳魚（2014（平成26）年級群）、2歳魚（2013（平成25）年級群）、3歳（2012（平成24）年級群）以上。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南海域では前年を下回る。日向灘は前年並。豊後水道南部、宿毛湾、土佐湾、紀伊水道外域では前年を上回る。熊野灘では前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12cm～18cmの0歳魚主体、18cm～21cmの1歳魚も漁獲される。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾～駿河湾では前年を上回る。相模湾では前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10cm～16cmの0歳魚主体、16cm～20cmの1歳魚も漁獲される。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を上回る

(2) 漁期・漁場：まき網は房総～常磐南部、仙台湾では8月と11月以降に、三陸海域では8月～12月に、道東海域では8月～10月に断続的に漁場が形成される。定置網は各地で期を通じて断続的に漁獲される。

(3) 魚体：16cm～19cmの1歳魚主体、19cm～23cmの2、3歳魚も漁獲される。11月以降は12cm～13cm前後の0歳魚が混じる。

漁況の経過（2015年4月～6月）および見通し（2015年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1970年代後半に増加し、1980年代は1千万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って減少して1994年に100万トンを下回り、1999年までは70万～90万トン台で推移した後再び減少し、2002年以降2007年まで10万トン台の低い水準で推移した。その後2008年～2013年に比較的良好な加入が続いたことと漁獲圧が低下したことにより増加し、2014年は90万トン以上になったと推定されている。

2011年級群は、0歳魚時点で、各地での漁獲が前年を上回り沿岸域の広い範囲で高い加入がみられ、沖合域の調査船調査結果からは、2010年級群には及ばないものの近年では比較的高水準の加入であることが示された。前年（2014年）は主に房総以北の海域で漁獲対象となり、3歳魚としては比較的高い来遊量水準であったが、残存資源は減少していると考えられる。

2012年級群は、0歳魚時点で、沖合域の調査船調査結果からは比較的高水準の加入であることが示され、未成魚越冬群資源量指数（千葉水総研）は1,397と2011年（408）を上回り、2000年以降では比較的高い水準であった。前年（2014年）まで漁獲対象だったが前期（2015年4月～6月）の漁況は低調であり、今期も3歳魚として漁獲対象となるものの、残存資源は減少していると考えられる。

2013年級群は、0歳魚時点で、秋季北西太平洋浮魚資源調査（中央水研）による道東～千島沖の亜寒帯域現存量が66億尾と2012年（57億尾）をやや上回ったが、2010年（153億尾）、2011年（74億尾）を下回った。沿岸域では、未成魚越冬群資源量指数は1,757と比較的高い水準であったが、0歳魚期、1歳魚期の各地での漁獲は概ね低調であった。本年前期も2歳魚としての漁獲状況は前年同期を下回っており、今期も2歳魚として漁獲対象になるが来遊量は前年を下回ると考えられる。

2014年級群は、0歳魚時点で、秋季北西太平洋浮魚資源調査（中央水研）による道東～千島沖の亜寒帯域現存量が119億尾と、2011～2013年級を上回り、2010年級（153億尾）に次ぐ水準となるなど高い値を示した。未成魚越冬群資源量指数は2,065と、2011～2013年級群を上回り、2010年級群（3,374）に次ぐ高い水準と評価されている。また各地での0歳魚としての漁獲量が非常に多く、熊野灘～房総海域で2014年夏季以降近年にない好漁となった。これらのことから2014年級群の加入量水準は高いと判断され、今期の漁獲の主体となり、来遊量は前年同期を上回ると考えられる。

2015年級群は、産卵量は160兆粒（2015年6月までの暫定値）と、2014年（452兆粒）を下回ったものの2011年以降の高い水準にある。マシラスは、前期までの漁獲量が特に渥美外海～駿河湾で前年を大きく上回るなど多く出現している。沖合域の調査では、5月～6月の移行域幼稚魚調査（中央水研）に基づく加入量指数が101.5と、近年では2012年～2014年（123.2～158.0）を下回るものの2011年（28.2）を大きく上回った。加入量と正の関係がみられる親潮南下指数は前年を上回った。日向灘～土佐湾ではすでに漁獲の主体となっており、前年を上回る漁獲となっている。これらの情報から、現時点での0歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、2015年級群の加入量水準は、2014年級群を下回るものの比較的高い水準と判断される。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：近年の漁獲状況から今期の主な漁獲対象は0歳魚（2015年級群）であり、1歳魚（2014年級群）も対象となる。北薩および薩南海域では前期の漁獲量は前年を下回り低調に推移していることから、来遊量は前年を下回る。日向灘では、前期の漁獲量は前年を上回ったが、加入量指標値（マシラス・幼魚漁獲量等）は前年並となったことから、来遊量は好調であった前年並となる。豊後水道南部では、6月までの0歳魚の漁獲量が前年を大きく上回って好調に推移していることから、来遊量は前年を上回る。宿毛湾、土

佐湾では前期の漁獲量は前年を大きく上回っており、周辺海域の0歳魚の来遊水準も高いことから、来遊量は前年を上回る。紀伊水道外域西部では前期の0歳魚漁獲量が前年を上回っており、来遊量は前年を上回る。紀伊水道外域東部では2015年1月～6月の漁獲量が近年で最も多く好調に推移した。前年の8月～12月は非常に低調であったことから、今期の来遊量は前年を上回る。熊野灘では2014年後半以降好漁が続く、2015年1月～2月まで前年を大きく上回る好漁であったが、3月以降は低調となり2015年3月～6月の漁獲量は前年を下回った。この好漁は1歳魚(2014年級群)主体であった。今期は0歳魚が主体となる。0歳魚の定置網における漁獲量は前年を下回っているが、周辺海域の0歳魚の漁況が好調であることから、今期の来遊量は前年並～下回る。

- ・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は12cm～18cm。1歳魚は18cm～21cm。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

・来遊量：近年の漁獲状況から今期の主な漁獲対象は0歳魚(2015年級群)であり、1歳魚(2014年級群)も漁獲される。0歳魚は、春季にシラス～ヒラゴとして沿岸部へ来遊し成長したものが今後の漁獲の主体となると考えられ、伊勢・三河湾～駿河湾では、春季のマシラス漁獲量が好調であった前年をさらに上回ったことから、今期0歳魚の来遊量は前年を上回ると考えられる。相模湾では、春季マシラス漁獲量が前年を下回ったことから、今期の0歳魚の来遊量は前年並～下回る。1歳魚はこれまでの漁況経過から比較的豊度の高い年級と考えられ、今期の来遊量は前年を上回る。

- ・漁期・漁場：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は10cm～16cm、1歳魚は16cm～20cm

(3) 房総～三陸海域、道東海域(まき網、定置網)

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から今期の漁獲対象は主に1～3歳魚であり、期終盤の11月以降には0歳魚が混じる。3歳魚(2012年級群)は、前年に2歳魚として漁獲対象となったが、漁獲量は2011年級群が2歳魚であった2013年を下回った。前期の漁況も低調であることから、今期も漁獲対象となるものの、3歳魚としての来遊量は前年を下回ると予測される。2歳魚(2013年級群)は、前期の漁況は低調であり来遊量は前年同期を下回ると予測される。1歳魚(2014年級群)は、前期の漁獲の主体を占め、漁獲量は前年同期を大きく上回った。今期も引き続き漁獲の主体となり、来遊量は前年同期を上回る。0歳魚(2015年級群)の加入量は、沖合域調査(移行域加入量調査)の結果から近年の高い水準を維持しているものと考えられるものの、多かった前年(2014年級群)は下回ると考えられ、来遊量は前年を下回る。全体では前年を上回ると考えられる。

・漁期・漁場：近年の魚群の来遊状況から、まき網は、8月は房総～常磐南部、仙台湾～三陸海域で、9月～10月は三陸海域で、11月以降は房総～常磐南部、仙台湾～三陸海域でそれぞれ断続的に漁場が形成される。また、8月～10月には道東海域でも漁場が形成される。常磐北部海域は現在まき網の操業自粛措置がとられている。定置網は各地で期を通じて断続的に漁獲される。

・魚体：近年の出現状況から、1歳魚は16cm～19cm、2歳魚は19cm～21cm、3歳以上は21cm以上。漁期終盤に漁獲対象となる0歳魚は12cm～13cm前後。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2015（平成27）年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2015（平成27）年級群）、1歳魚（2014（平成26）年級群）、および2歳魚（2013（平成25）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～土佐湾では予測が困難。伊勢・三河湾～駿河湾では前年並。相模湾では予測が困難。鹿島灘～常磐南部では前年を上回る。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10cm～13cmの1歳魚および9cm以下の0歳魚。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾～渥美外海では前年並～下回る。駿河湾ではほとんど漁獲がない。相模湾では前年並～下回る。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10cm～13cmの1歳魚および11cm以下の0歳魚。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：常磐～房総海域の1そうまき網は12月以降。道東のまき網は9月～10月。三陸の定置網、常磐南部・鹿島灘の小あぐりおよび房総沿岸海域の2そうまき網は全期間。

(3) 魚体：0歳魚は12cmまで、1歳魚は12月で12cm～13cm。

漁況の経過（2015年4月～6月）および見通し（2015年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の推定資源量は1998（平成10）年から2010（平成22）年まで70万トン～150万トンで推移し、2014（平成26）年の資源量は62万トンと推定された。資源水準は過去30年で中位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2013年級群（2歳魚）は、2014年の秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）において10cm以上の魚体で漁獲されており、現存量、有漁点CPUEはいずれも2001年以降最低であった。

2014年秋季の道東海域流し網調査（釧路水試）および2014年8月～10月の道東海域におけるまき網では、僅かに漁獲された程度で低水準であった。2014年11月～2015年6月の常磐房総海域での12cm以上の魚体（2歳魚主体）の漁獲量は5千トンで、前年同期（12千トン）より少なく、1999年以降最低であった。こ

れまでの動向から、2013年級群は低水準であり、今後もほとんど漁獲対象とならないと考えられる。

2014年級群（1歳魚）は、2014年の伊勢湾以東におけるシラス漁況が好調で漁獲量は前年を上回ったのに対し、紀伊水道以西の漁獲量は前年を下回った。2014年の秋季北西太平洋中層トロール調査（中央水研、9月～10月）において9cm以下の魚体で漁獲されており、推定現存尾数および有漁点CPUEは前年と同程度の低水準であった。2014年の秋季の道東海域流し網調査（釧路水試）では0歳魚は見られなかった。2014年11月～2015年6月までの常磐房総海域での11cm以下（1歳魚主体）の漁獲量は5千トンで、前年（16千トン）を下回り1999年以降最低であった。以上の状況から、2014年級群のうち沿岸発生群は前年を上回る海域もあるが、沖合発生群は低水準と考えられる。

2015年級群（0歳魚）は、伊勢湾以東の春季のシラス漁況が好調であった。しかし、2015年の北西太平洋サンマ資源調査（東北水研、6月～7月）における9cm以下の推定現存尾数は2001年以降最低であった。以上のように、不確実性は高いものの、沖合発生群は低水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部のシラス（船曳網）

土佐湾以西では、2015年4月～6月のシラス漁獲量は、豊後水道東側を除き、前年並～下回った。今期は現段階で根拠となる情報が得られておらず来遊量の予測は困難である。伊勢・三河湾～渥美外海では、伊勢湾内の産卵水準が低いものの、黒潮流路の予測から冷水域となることが想定され、前年並と考えられる。遠州灘～駿河湾では、過去の漁獲動向から推察すると前年並と予測される。相模湾では来遊量の予測は困難である。鹿島灘～常磐南部でのシラス漁況は黒潮流路の型と関係が強く、A型で不漁、D型で好漁、その他で中漁となる傾向がある。今期はB型からC型に移行すると予測されていることから、シラスは中漁水準で前年を上回ると考えられる。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

北薩～薩南海域では、西薩海域の2014年秋季のシラス漁況が平年並であったことから、来遊量は非常に好調であった前年を下回ると予測される。日向灘における今期の主たる漁獲対象は、夏季に盛漁となる沿岸発生群である。日向灘での7月～12月の漁獲量は、1月～6月の宿毛湾のまき網漁獲量と正の相関が認められており、2015年1月～6月の宿毛湾の漁獲量が前年を下回ったことから、来遊量は前年を下回ると考えられる。豊後水道西側では、2015年1月～3月の潮岬以西の産卵量が前年を下回り、2015年4月～6月のシラス漁が前年並であったことから、8月以降に主体となる0歳魚の大きな来遊は見込めず、来遊量は前年を下回ると予測される。豊後水道東側では、周辺海域で発生したと推定される個体が漁獲の主体となるが、2015年1月以降のカタクチイワシの水揚げが低調であること、カタクチシラスの5月以降の水揚げが前年を下回って推移していることから、来遊量は前年を下回ると予測される。宿毛湾・土佐湾では、宿毛湾における小型まき網の漁況から前年を下回ると考えられる。紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

熊野灘ではまとまった漁獲がない。伊勢・三河湾～渥美外海では、夏秋季の漁獲量は春季のシラス漁獲量が多いほど多くなる傾向がある。今春のシラス漁獲量は好調であったが、伊勢湾内では、9月まで主体となる1歳魚の湾内への来遊が今期も期待できず、総じて来遊量は好調であった前年並～下回ると予測される。駿河湾では、近年8月以降に漁獲実績がほとんどない。相模湾では、ここ数年は8月中旬以降、ほとんど漁獲されない状況が継続していることから、来遊量は低調な前年並～下回ると予測される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

2014年11月～2015年6月の常磐・房総海域における漁獲量（千葉県、茨城県、福島県の計）は10千トンで、前年（28千トン）を下回った。1歳魚（2014年級群）と想定される11cm以下の小型魚および2歳魚（2013年級群、12cm以上）の漁獲量は1999年以降で最低となった。今後の主たる漁獲対象となる1歳魚（2014年級群）の残存資源量は前年よりも低いと考えられる。

2015年3月～6月の宮城県の定置網による漁獲量は78トンで、平年同期（4,192トン）の2%であった。三陸沿岸海域の定置網には常磐・房総海域の魚群の一部も来遊すると考えられ、今漁期の主体となる1歳魚（2014年級群）は、資源水準が低いと判断されており、前年を下回ると考えられる。

道東海域では、近年まき網による漁獲量が低い水準にあること、および2015年6月下旬の釧路水試による調査船調査の結果によると、採集尾数およびCPUEは2014年を上回ったものの、非常に低い水準にある。

常磐・房総海域では例年、南下期の12月以降から盛漁となる。資源水準が高ければ、1月～6月に常磐・房総海域で漁獲された9cm～11cmの小型群が秋季に12cm前後となって道東海域に来遊し、冬季に12cm～14cmの大型群（年明け2歳魚）となって再来遊すると考えられる。1歳魚（2014年級群）の資源水準は低いと考えられており、九十九里海域を中心に夏秋季に漁獲対象となる0歳魚（2015年級群）、および南下回遊による0歳魚の12月以降の漁場への加入については判断材料が乏しい。以上のことから、今期の来遊量は前年を下回ると考えられる。漁場および体長については近年の傾向および最近の漁獲物の体長から判断した。なお、福島県沖の海域は、現在まき網の操業自粛措置がとられている。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し (2015年8月～12月)

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚(2015年級群：2014年秋～2015年生まれ)、
1歳魚(2014年級群：2013年秋～2014年夏生まれ)
魚体は被鱗体長

- (1) 来遊量：日向灘、豊後水道東側、紀伊水道外域東部では前年を上回る。
北薩および薩南、豊後水道西側、宿毛湾、土佐湾、紀伊水道外域西部、
熊野灘では前年を下回る。
全体としては前年を上回る。
- (2) 漁期：全期間
- (3) 魚体：0歳魚(8cm～20cm)が主体となる。海域により1歳以上(20cm～26cm)
も対象となる。

漁況経過(2015年1月～6月)および見通し(2015年8月～12月)についての説明

1. 資源状態

本系群の資源状態について、産卵調査結果から算出した産卵量(日向灘～潮岬：海区III)により評価した。過去36年間(1979年～2014年)の年間産卵量(前年9月～当年8月、海区III)から2014年の資源水準は高位、最近5年間(2010年～2014年)の産卵量(海区III)から、動向は増加と判断した。

産卵量(海区III)は1978年以降、増減を繰り返しながらも全体としては増加傾向にある。1990年代前半までは20兆～60兆粒の範囲であったが、2007年は過去最高の139兆粒に及んだ。2008年は減少したが、2009年以降は80兆～100兆粒の範囲にあり、最近5年間(2010年～2014年)はやや増加傾向である。2015年は104兆粒と見込まれる。

過去36年間(1979年～2014年)の年間産卵量(海区III)の最大値と最小値の間の範囲を三等分し、高位、中位、低位の水準を定義すると(1978年は前年1977年9月～12月のデータが無いため、最小値判断からはずした。)、2014年の産卵量はほぼ高位と中位の境界線上ながらも高位と判断された。なお、2015年の産卵量(海区III)予測値も高位にある。

最近5年間(2010年～2014年)の産卵量(海区III)から、動向は緩やかながらも増加とするのが妥当であると判断した。

2014年の漁獲量(鹿児島県～三重県)は54千トンであり、2011年～2013年に引き続いて過去約30年間で最高水準にある。

2. 来遊量、漁期・漁場

2015年期も0歳魚(2014年秋～2015年生まれ)主体の漁況になることが推測されるため、前期(1月～6月)の漁況等から0歳魚の加入状況を予測した。予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期(1月～6月)水揚量と後期(8月～12月)水揚量には、強い正の関係がある。2015年前期(1月～6月)の水揚量は14千トンであった。

2000年～2014年の前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量の関係を用いて、2015年後期（8月～12月）の水揚量は外挿的に31千トンと予測された。2012年後期～2014年後期（8月～12月）水揚量は、26千トン、21千トン、21千トンであった。従って、2015年後期（8月～12月）は、外挿のため注意を要するが、海域全体としては前年を上回ると予測される。

北薩および薩南海域では、0歳魚（11cm～17cm）が主体となる。8月以降の漁獲の主体は、枕崎沖に太平洋側から来遊する群となる。5月～6月に内之浦漁協の定置網に入網するカタクチイワシとの混ざり銘柄のCPUEと8月～12月の枕崎港の水揚量には正の関係が見られ、5月～6月の混ざり銘柄のCPUEは前年より低い値を示していることから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

日向灘では、0歳魚～1歳魚（13cm～20cm台）が主体となる。下半期は0歳魚主体の漁況となること、0歳魚の漁況と加入量指標値の間に正の関係が見られること、2015年の加入量指標値は前年を上回っていることから、来遊水準は前年を上回ると予測される。

豊後水道西側では、8月～10月は0歳魚（10cm～15cm）、11月～12月は15cm～20cmが主体となる。8月～12月の期間中の漁獲は、2011年～2014年が1986年以来過去最高水準の漁獲であることと、その4年間の傾向から7月～10月に大幅に漁獲が増えると考えられる。しかし、漁獲の主体となる0歳魚の資源量水準は、4月～6月のまき網漁獲量（0歳魚主体）が前年を下回ったため、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道東側では、0歳魚（8cm～16cm）が主体となる。新規加入が認められる4月～6月と0歳魚主体の漁獲となる8月～12月の漁獲量には正の関係が認められる。この関係から判断すると、来遊水準は前年を上回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、0歳魚主体となる。県内の定置網、まき網における入網調査と聞き取り調査によると、0歳魚の加入水準は低いと推定されることから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、2015年4月～6月の標本漁協における漁獲量は前年を下回っているため、来遊水準は全体として前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、近年、1歳魚を漁獲対象とする1そうまき網で好漁が続いており、来遊状態は良いと推測される。また、2014年の1そうまき網の漁獲はほとんどが5月～7月であったことから、今期の来遊水準は前年・平年を上回ると予測される。

熊野灘では、0歳魚（8cm～20cm）および1歳以上（20cm以上）が主体となる。例年、8月～12月に漁獲主体となるのは0歳魚であり、前期の定置網での漁獲状況が前年を下回っていることから、今期も前年を下回ると考えられる。1歳魚は年明けから継続して漁獲されていないことから、前年同様、まとまった漁獲にはならない。2歳以上は過去にない好漁が継続しているが、今期の漁況に大きな影響を与えることはない判断される。以上より、来遊水準は全体として前年を下回ると予測される。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2015（平成27）年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2015（平成27）年級群）、1歳魚（2014（平成26）年級群）、
2歳魚（2013（平成25）年級群）、3歳（2012（平成24）年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：いずれの海域も低調であった前年を上回る。

(2) 魚体：いずれの海域も0、1歳魚主体。0歳魚は19cm以下、1歳魚は19cm～25cm、2歳以上は25cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域西部は極めて低調であった前年並～上回る。紀伊水道外域東部は前年並。熊野灘は極めて低調であった前年を上回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部は0歳魚主体、紀伊水道外域東部は1歳魚～3歳魚主体。熊野灘は1歳魚および2歳以上が主体で、これに0歳魚が加わる。0歳魚は19cm以下。1歳魚は21cm～25cm、2歳以上は25cm以上。紀伊水道外域東部で主体となる1歳魚～3歳魚は22cm～31cm。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：低調であった前年を下回る。

(2) 魚体：主体となる0歳魚は19cm以下、1歳魚は19cm～25cm。

漁況の経過（2015年1月～6月）および見通し（2015年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが1997年以降減少し、2009年以降は横ばいで推移した。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.6億尾～7.3億尾と低い水準で推移している。現在の資源量は6万トン～7万トン程度であり、資源水準は中位、動向は横ばいと判断される。漁獲状況は海域間で異なり、熊野灘以西の海域では極めて低調であった前年を上回る海域が多いが、相模湾は低調な漁況が続いており、房総海域以北では好調であった前年より漁獲量が減少している。したがって来遊量の予測は各海域の漁獲状況を考慮して判断する必要がある。

2012年級群（3歳魚）の加入量は5.9億尾と評価されており、2014年夏季には2歳魚として主に犬吠以北の海域で漁獲対象となったが、残存資源は少ない。

2013年級群（2歳魚）の加入量は5.0億尾と評価されている。近年の2歳魚としては、資源量水準は高くないと考えられ、1歳魚（2014年級群）とともに漁獲されるが残存資源は少ない。

2014年級群（1歳魚）は今期0歳魚とともに漁獲の主体となると考えられるが、これまでの漁況は多くの海域で極めて低調に推移しており、2015年度評価では前年2013年級群を下回り過去最低水準の3.6億尾と推定されている。

2015年級群（0歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。加入量の指標となる各県地先の漁獲状況は、4月～6月の3か月間で比較した場合、宮崎県南部定置網アジ仔 CPUE および宿毛湾ゼンゴ資源量指数は前年同期を下回り、宇和島港ゼンゴ CPUE、伊勢湾豆板漁業当歳魚漁獲量、串本棒受網当歳魚漁獲量、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年を上回った。しかしいずれも低水準である。これらのことから、2015年級群の加入量水準は低水準ながら、極めて低水準であった前年（2014年級群）は上回ると考えられるが、現時点での0歳魚の加入量の見積もりは不確実である。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに、前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚：19cm以下、1歳魚：20cm～25cm、2歳魚：23cm～27cm、3歳以上：25cm以上。3歳以上は、現状では年齢に対応した体長区分は困難である。

(1) 北薩～土佐湾

いずれの海域も今期は0歳魚（2015年級群）および1歳魚（2014年級群）が主体となる。

北薩～薩南海域では2015年1月～6月に0、1歳魚（2015、2014年級群）主体にまとまった漁獲がみられたことから、今期の来遊量は前年を上回ると考えられる。2歳魚以上は近年低調に推移しており、今期も低調であった前年並となる。全体の来遊量は前年を上回ると予測される。

日向灘の7月～12月の0歳魚の漁獲量は、5、6月における宇和海中部まき網の0歳魚の漁獲動向と関係がみられており、当年5、6月の宇和海中部まき網0歳魚漁獲量が前年を上回っていることから、今期の来遊量は前年を上回ると予測される。

豊後水道南部西側では、4月～6月の大分県南部定置網の小アジ（0歳魚）漁獲量が前年を上回っており、近県の定置網での漁獲状況も前年に比べ好調であることから、来遊水準は低水準であるが前年を上回ると予測される。

豊後水道南部東側では、主体となる0歳魚の5、6月の漁獲水準が前年同期を上回っていることから、来遊水準は前年同期を上回ると予測される。

宿毛湾～土佐湾では、定置網・まき網における入網調査から判断すると、主体となる0歳魚（2015年級群）の来遊水準は低いと考えられる。ただし、近県では低調ながら0歳魚がまとまって来遊していたことから、来遊量は少なかった前年を上回ると考えられる。

(2) 紀伊水道外域～熊野灘

紀伊水道外域西部では、2015年1月～6月の漁獲量は前年同期をやや下回っており、今後も低調な漁況で推移すると考えられる。前年同期の標本漁協における漁獲量は1990年以降最低と極めて低い水準であったことから、今期の来遊量は低水準ながら、極めて低調であった前年並～上回ると予測される。

紀伊水道外域東部では、2015年1月～6月の1そうまき・2そうまき網による漁獲量は前年同期を大きく下回った。熊野灘南部の定置網、串本の棒受網は低水準であった前年は上回ったものの低調であった。これらのことから、今期の来遊量も増加は期待できず、前年並の低水準と予測される。

熊野灘への来遊量は近年極めて低調で推移している。近年は、中型まき網で漁獲される1歳魚の1月～6月漁獲量と7月～12月漁獲量に正の相関が見られることから、1歳魚は8月～12月も低水準ながら前年を上回ると考えられる。0歳魚は定置網の漁況から前年を下回ると考えられるが、総じて極めて低調であった前年並～上回る来遊量と予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸の定置網の2015年1月～6月の漁獲量は前年同期を上回ったものの低調であった。西湘地区の定置網漁獲量は前年同期を下回っており、今期も前年を上回る来遊は見込めない。0歳魚（2015年級群）が主体となり、来遊量は前年並～下回ると予測される。

(4) 房総以北海域の情報

北部太平洋まき網による2015年1月～6月の水揚量は4,250トンと、前年同期（7,743トン）を大きく下回った。これはサバ類やマイワシの漁獲が好調でマアジへの漁獲努力が少なかった可能性が考えられる。2015年1月～6月の漁獲量は宮城県の定置網等では92トン、岩手県の定置網では0.7トンでいずれも前年同期を下回った。青森県平館の定置網では37.5トンと近年では比較的高かった。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2015（平成27）年8月～12月）

対象海域：薩南～豊後水道南部～土佐湾、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚（2015（平成27）年級群）、1歳魚（2014（平成26）年級群）、
2歳魚（2013（平成25）年級群）、3歳魚（2012（平成24）年級群）、
4歳（2011（平成23）年級群）以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年並。1歳魚は薩南海域では前年並、日向灘～豊後水道南部、宿毛湾～土佐湾では前年を下回る。2歳魚は前年並～下回る。3歳以上は少ない。さば類全体としては、薩南海域では低調であった前年並。日向灘、豊後水道南部、宿毛湾～土佐湾では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、薩南海域では34cm～38cm（3歳魚）。日向灘～豊後水道南部では20cm～30cm（0、1歳魚）主体。宿毛湾～土佐湾では28cm～38cm（1歳魚～3歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバは低調であった前年並。さば類全体としては低調であった前年並。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、30cm～37cm（2歳魚～5歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年を下回る。1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年を上回る。さば類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、20cm～32cm（0、1歳魚）主体に、27cm～41cm（2歳魚～5歳魚）が混じる。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。さば類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期を通じて三宅島周辺海域が主漁場となる。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、28cm～32cm（2歳魚）主体に、25cm～30cm（1歳魚）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を上回る。4歳魚は前年を下回る。マサバとしては前年並。ゴマサバは前年を上回る。さば類全体としては前年並。

(2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は三陸海域、10月～12月は主に三陸南部～犬吠海域に形成される。道東海域では8月～10月に形成される。

(3) 魚体：マサバは25cm～32cm（2歳魚）主体に、23cm～28cm（1歳魚）と32cm以上（3歳以上）も漁獲される。ゴマサバは期前半に32cm～34cm前後（2、3歳魚）主体、期後半に28cm～30cm前後（1、2歳魚）主体に漁獲される。

漁況の経過（2015（平成27）年1月～7月）および見通し（8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990～2000年代に低い水準にあったが、近年の加入量水準の高い年級群の発生と漁獲圧の低下により増加している。

2010年級群（5歳魚）は、7月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入尾数が13億尾であり、加入量水準は近年の平均程度である。

2011年級群（4歳魚）は、推定加入尾数が8億尾と近年の平均を下回る水準である。

2012年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が18億尾と近年では比較的高い水準である。

2013年級群（2歳魚）は、推定加入尾数が62億尾と近年では卓越して高い水準であり、これまでの各地漁業で主体となって漁獲されている。1月～6月に漁獲された魚体が25cm～27cm前後と、例年のこの時期に漁獲される2歳魚の魚体よりもかなり小さく、成長および成熟の遅れがみられている。

2014年級群（1歳魚）は、調査船調査に基づく資源量指数による推定加入尾数は、最近年のため推定値の不確実性は高いが、近年では比較的高い水準と推定された。これまでの各地漁業の漁獲状況では、卓越して高い水準である2013年級群の同期を大きく下回っている海域が多く、1歳魚の資源量の指標となる未成年越冬群指数（茨城水試）は低水準であった。調査船調査では、2015年6月の三陸～道東沖の流し網調査（釧路水試）や5月～7月の北西太平洋北上期中層トロール調査（北上期浮魚類資源調査・移行域幼稚魚調査（東北水研・中央水研・北水研））における1歳魚としての出現は前年を下回った。

2015年級群（0歳魚）は、2001年以降実施している北上期中層トロール調査における出現率（漁獲のあった調査点の割合）は26%であり、過去の同調査（15年間）で上位9番目であった。同調査漁獲物による7月時点での推定平均体長は加入豊度と相関が高いが、2015年は15.2cmであり、過去の同調査で上位8番目であった。また、近年における稚仔魚期の平均成長率は加入豊度と相関が高いことがわかっているが、2015年の成長率は1.20mm/日であり、2002年以降において上位9番目であった。現時点での0歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、加入尾数は近年の平均～下回る水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半以降高い水準にある。0歳時に黒潮～親潮移行域を回遊して加入する群が資源の主な部分を占めるようになっている。

2010年級群（5歳魚）は、7月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入尾数が9億尾であり、加入量は近年の平均を下回る水準である。

2011年級群（4歳魚）は、推定加入尾数が12億尾と近年の平均程度の水準である。

2012年級群（3歳魚）は、推定加入尾数が15億尾と近年の平均を上回る水準である。

2013年級群（2歳魚）は、推定加入尾数が16億尾と近年の平均を上回る水準である。

2014年級群（1歳魚）は、調査船調査や漁業情報に基づく資源量指数による推定加入尾数は、最近年のため推定値の不確実性は高いが、近年の平均程度の水準と推定された。これまでの各地漁業の漁獲状況では、2013年級群の同期を下回っている海域が多い。静岡県棒受網CPUEに基づく0歳魚資源密度指数（静岡水技研）は5,382であり、2013年級群（3,345）を上回ったが卓越して高かった2009年級群（16,782）を下回り、2012年級群（5,950）程度であった。調査船調査では、6月の三陸～道東沖の流し網調査や4月～7月の北上期中層トロール調査における1歳魚としての出現は前年の1歳魚を下回っている。

2015年級群（0歳魚）は、定置網などの各地漁業で漁獲がみられている。調査船調査では、2001年以降実施している北上期中層トロール調査における出現率は32%であり、過去の同調査で上位6番目であった。同調査漁獲物による7月時点での推定平均体長は加入豊度と相関が高いが、2015年は16.1cmであり、過去

の同調査で上位 9 番目であった。現時点での 0 歳魚の加入量水準の見積もりは不確実であるが、加入量は近年の平均程度の水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0 歳魚（2015 年級群）は、これまで得られている情報から加入量水準が近年の平均～下回る程度と考えられ、来遊量は前年を下回る。1 歳魚（2014 年級群）は、加入量水準が近年では比較的高いと推定され、来遊量は多かった前年を下回る。2 歳魚（2013 年級群）は、加入量水準が近年では卓越して高く、来遊量は前年を上回る。3 歳魚（2012 年級群）は、加入量水準が近年では比較的高く、来遊量は前年を上回る。4 歳魚（2011 年級群）は、加入量水準が近年の平均を下回り、来遊量は前年を下回る。

以上のことから本予測期間は 2 歳魚（2013 年級群）が主体で 1、3 歳魚（2014、2012 年級群）も漁獲される。全体の来遊量は前年並と考えられる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁況は、犬吠以北海域のまき網では 2 歳魚主体に前年並の漁獲で経過し、5 月以降三陸南部海域にも漁場が形成された。三陸海域の定置網では前年を大きく上回る漁獲がみられた。伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網（CPUE）では 3 歳以上主体に前年を上回った。熊野灘以西海域では前年までと同様に低調であったが、時期・海域によってはゴマサバを上回る漁獲がみられた。

1 月～6 月の漁獲量は、犬吠以北海域のまき網は 101.9 千トン（前年同期実績 114.4 千トン）であった。なお、常磐海域の福島県沖合域は現在まき網の操業自粛措置がとられている。犬吠以北海域の定置網などは 9.5 千トン（同 2.2 千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は 2.9 千トン（同 2.8 千トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は 23.2 千トン（同 7.8 千トン）、紀伊水道外域～薩南の全漁業では 3.7 千トン（同 3.0 千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

魚体は、犬吠以北海域のまき網では、25cm～27cm 前後の 2 歳魚が主体であった。産卵場である伊豆諸島周辺海域ではおもに三宅島周辺が漁場となり、30cm～40cm 前後の 2 歳魚～5 歳以上が漁獲された。駿河湾～熊野灘のまき網では、伊豆諸島周辺海域とほぼ同様の組成に加え、30cm 以下の 0、1 歳魚も漁獲された。

今期は、犬吠以北海域のまき網、定置網での漁獲が中心となる。4 月～7 月の常磐～三陸～道東海域における調査船調査では沖合を北上する魚群（2 歳魚主体に 1 歳魚も）が確認されている。魚群の移動は例年と同様の経過をたどると考えられ、2 歳魚主体に 1、3 歳魚も対象に、まき網漁場は 8 月～10 月は三陸海域および道東海域に、10 月～12 月は三陸～犬吠海域に形成される。各地の定置網では期を通じて断続的に漁獲される。伊豆諸島周辺海域、熊野灘、紀伊水道外域、および土佐湾～豊後水道南部～薩南海域での来遊量は低水準であり、ゴマサバに混獲される程度であるが、一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別体長は、これまでの体長組成の推移や年齢査定の結果から概ね次の通りである。1 歳魚：23cm～28cm 前後、2 歳魚：25cm～32cm 前後、3 歳魚：32cm～36cm 前後、4 歳以上：35cm 以上。0 歳魚は例年の傾向から 19cm～25cm と予測される。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0 歳魚（2015 年級群）は、これまで得られている情報から加入量水準が近年の平均程度と考えられ、来遊量は前年並となる。1 歳魚（2014 年級群）は、加入量水準が近年の平均程

度と推定され、来遊量は前年を下回る。2 歳魚（2013 年級群）は、加入量水準が近年の平均を上回り、来遊量は前年並となる。3 歳魚（2012 年級群）は、加入量水準が近年の平均を上回り、来遊量は前年を上回る。4 歳魚（2011 年級群）は、加入量水準が近年の平均程度であり、来遊量は前年を上回る。

(2) 漁期・漁場、魚体

1 月～6 月の漁況は、薩南海域では 2、3 歳魚主体に前年並であった。日向灘では 1 歳魚主体に前年を下回った。豊後水道南部では 2、3 歳魚主体に前年を大きく下回った。宿毛湾～土佐湾ではまき網は 2 歳魚主体、釣りは 3 歳以上主体、定置網は 4 月以降に 0 歳魚主体で漁獲され、前年を下回った。紀伊水道外域では 0 歳魚～4 歳以上が漁獲され、前年を上回った。熊野灘は 3 歳魚～6 歳魚主体に 0、1 歳魚も漁獲され、前年を下回った。伊豆諸島周辺海域では 1 歳魚～4 歳魚が漁獲され、前年並であった。犬吠～三陸海域では 1 歳魚～3 歳魚がマサバに混獲され、前年を上回った。

1 月～6 月の漁獲量（全漁業）は、薩南海域～紀伊水道外域は 19.0 千トン（前年同期実績 27.2 千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は 19.8 千トン（同 23.0 千トン）、犬吠以北海域は 10.9 千トン（同 3.7 千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

今期における各地の漁期・漁場と魚体は、薩南海域では 3 歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では 0、1 歳魚主体、宿毛湾～土佐湾では 1 歳魚～3 歳魚主体、紀伊水道外域では 2 歳魚～5 歳魚、熊野灘では 0、1 歳魚主体に 2 歳以上混じりでそれぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、近年の主漁場である三宅島周辺海域を中心に 2 歳魚主体で 1 歳魚も対象に期を通じて漁場が形成される。犬吠以北海域では 1 歳魚～3 歳魚がマサバに混獲される。

年齢別体長は、これまでの体長組成の推移や年齢査定の結果から概ね次の通りである。0 歳魚：30cm 以下で 20cm～25cm 主体、1 歳魚：25cm～30cm 前後、2 歳魚：30cm～35cm、3 歳以上：33cm 以上。（各年級群の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産試験場	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関)
三重県水産研究所	国立研究開発法人 水産総合研究センター 中央水産研究所